



マリア様の掟

shirarin

僕は暗い穴の中に落ちて行って死んだ。ヤバイ、やっちまった。

数秒後には、

「さっきのは無し！」

と言って、僕がまた画面上に現れる。ライフ、マイナス1。

もし本当にテレビゲームの様に「さっきのは無し」と言えるのなら。今ここにいる、十五階建てマンション一三〇六室のこの僕は、いつに「さっき」を設定するのかなあと、考えてもどうにもならない事を考え始めた。いつもの僕の悪い癖だ。

やめやめ。コントローラーを投げ出してベランダに出てみた。

どこまでも人工的に開拓されたこの街が、ちょうど夕陽のオレンジに染まっていく時間だった。この一瞬、街が無意味な美しさを取り戻しているようだ。

真下に見える、きちんと整備されたマンション備え付けの公園。今日もいつもの子供達が鬼ごっこをしている。この世界に時間がなかったら、あの子達はきっと永遠に遊び続ける。何故だか僕はそう思う。ほら、またあいつが鬼だ。確かあいつの名前はケンジ。ヤバイ、覚えてる自分が怖い。

ケンジに鬼が回ったら最後、ケンジはずっと鬼だ。見てるうちに、彼等のそんな暗黙のルールすら知ってしまった。それでもケンジは笑いっぱなしでちょこちょこ動いている。全く何がそんなに楽しいんだろう。僕も彼等ぐらいの年頃…四、五歳の頃はあんな風に笑っていたんだろうか。僕はもう十四にもなってしまった。

「ケンジー、帰るわよー。」

ほら、母親が呼びに来た。

「バイバーイ。」

「バイバーイ。」

いくつもの「バイバイ」の声が小さく僕の耳に届く。彼等の振る手は、何の疑いもなく明日また会える事を信じている手だ。

「ナオ兄ちゃん。」

妹だ。兄妹は僕しかいないのに妹は必ず「兄ちゃん」の前に僕の名前、ナオを付けて呼ぶ。

妹、鈴木アイは十歳にしては幼い気もする。一方で考えすぎだとも思う。

何故なら僕は恥ずかしい程夕方のテレビを見ているのだ。その時間帯にやっている番組に洗脳されてそんな気がする。大抵、歌舞伎町の今とかホームレスの人たちの生活とか、後は渋谷に集まる十代の性の実態なんて特集が組まれている。だからあのテレビの中の子供達が普通なんだと無意識に信じているかもしれないのだ。

そんな僕だから、妹のアイが時折、天使に見える事さえある。くりくりの天然パーマの薄茶色の髪、大きな黒目がちの瞳、色白の肌、ピンクの頬…全ての可愛らしさを備えて、アイはこの家に生まれてきた。そんな、僕に全然似ていないアイの事を、両親は愛していると思う。

僕よりずっと。

毎日思ってしまうのだ。しまった、また悪い癖が出た。考えても仕方がないのだった。

「ゴハンだよお、ナオ兄ちゃん。」

砂糖菓子のような声で、アイは爪を噛み、ミニーちゃんの縫いぐるみを抱えながら僕を見ている。

たくさんの空気を鼻から吸ったら、消毒液のにおいがした。僕の大好きなおいだ。世界中がこんなにおいでいっぱいになればいい。保健体育のノダ先生が、さっきからこっちを忌々しく見ているのは知ってるが、僕はシカトを決め込んでやった。

いいじゃないか、今日はラッキーだったんだ。ミシマテツオとアイダマサシの鉄拳を喰らわなくて済んだんだ。

昼休みの、誰もいない視聴覚室の前で、二人に捕まえられた。掃除当番の女子にゴミ捨てを押し付けられて、帰る途中の僕は油断しきっていた。

「よう、ナオ。」

ガムを噛みながら、ミシマテツオが近づいてきた。

「おい、マサ。ナオ、ナオ捕獲、捕獲成功。」

少し遅れてアイダマサキ登場。

僕の名前は片仮名で『ナオ』。鈴木ナオ。母さん曰く、「本来、名前は自分で自分にふさわしい名前を付けるものだと思うの。自分で生きて、答えを見つけるの。だからパパとママは、響きだけ、ヒントだけをあなた達にあげただけ…ナオ、アイ。」だそうだ。

まあ、どうでもいいけど何でこの二人は僕の事を「ナオ」と名前と呼ぶのだろう。頼むから「鈴木」と言ってくれ。

「ナオなー、断れよ。誰からゴミ捨てなんて押し付けられたんだよ。」

ミシマが僕の持っていたゴミ箱を見て言った。

「ユカ？ アヤノ？ あのへんのメンバーだろ、どうせ。あいつら最近調子乗ってんじゃねえの。分かってねえよ、ナオは俺達の可愛い可愛いマスコットだつてのに。」

そう言って、ミシマはぼしぼしと僕の肩を叩いた。ミシマのにやにやと嗤う口元はだらしなく、歯の間に給食の食べかすが挟まっている。込み上げてくる吐き気と、僕は闘う。

「そうそう、横取り禁止。なあ、ナオ。」

今日のラッキーはここから突然始まった。ミシマが僕の後ろに回り、両腕をロックしてアイダのパンチが腹に決まるというのがお約束なのに、今日は何故か奇跡的にすり抜けられたんだ。やった、やった、やった…。

その後の事は、あんまり覚えていない。気がついたら階段の踊り場に僕は倒れていて、右足がじんじんと痺れていた。上の方から二人の笑い声が聞こえてきた。

「ナオー、危ねえよ。」

「大人しくしてりゃいいんだよー、バカだなー。」

そう言いあってまた笑う。チャイムが鳴り、笑い声は次第に遠ざかっていった。

どうやら逃げようとして足をもつらせ、階段を踏み外して下まで落ちたようだ。背中から床の冷たさがきーんと伝わり、すぐに全身を巡った。僕は心底ほっとしていた。今日は堂々と保健室に行ける。

殴られたのがあからさまに分かるような時、僕は体育倉庫か校舎裏に身を潜める。例えば鼻血が止まらないときや、目の周りに痣が出来た時。マイタオルを持参し、傷を冷やししながら、青空

と何も無い大地を頭に描く。昔々の、僕が生まれる前の、何者も生まれる前のこの場所の姿を、まっさらな世界を想像してみる。死んだらこんな場所にまた還るのだろうか、なんて無意味な事をまた考えてやり過ごす。

今日は天国だ。この白いシーツ。薄いピンクのカーテンは何も詮索などせず、ただ柔らかく僕を包む。ノダ先生の仕事を増やしてしまったのは申し訳ないが、僕はこの至福の時を手放す気など更々なかった。

「鈴木君、まだ痛むの？」

ノダ先生のちょっと棘のある声。

「はい…。」

弱々しく答える僕。足が痛いのは本当なんだから、演技する必要もないのにしてしまう僕。ノダ先生は、ふう、と息を吐くと諦めたように言った。

「じゃあもう少し寝てなさい。冷湿布がもうすぐ効いてくるはずだから。A組だったっけ？ ナカムラ先生には伝えておくわ。」

グラウンドからはピッ、ピッという笛の音がリズムカルに聞こえてくる。そうだ、五時間目は体育だった。やった、二重にラッキー。僕の唯一嫌いな科目が体育なのだ。嬉しさに一人で悶えていると、カーテンの隙間から片目が覗いていて僕は飛び起きた。一息ついて恐る恐るカーテンを開けた。姿を現したのはノダ先生ではなく、見た事もない女子だった。

その小さな女子は、両手をはがっちりと胸の前で組み、肩を小刻みに震わせ、僕の方をちらりと見ては視線を落とし、またちらりと見る目の動きを繰り返している。

「ごめんなさい…。」

突然謝られた。僕は無防備に緩んでいた顔を見られた恥ずかしさと、幸福な時間を邪魔された苛々の入り混じった気持ちをそのまま、

「誰？」

という短い問いかけの口調に込めた。

「まりあ。」

「は？」

「私の名前。私、川崎まりあ。」

そう言ったきり、その女子は下を向いて黙ってしまった。沈黙の時間が暫く流れた。

「ノダ先生は？」

話す事もないので聞いてみた。カーテンから少し顔を出してみると、保健室の中は僕とその女子—川崎まりあの二人だけのようだった。

「ついさっきまでいたんだけど…何か出て行っちゃったの。」

答えにならない答えを川崎まりあは返してきて、

「あ、そう。」

と僕も興味なさそうに頷いた。

時計を見ると、授業が終わるまで後二十分だった。ノダ先生が生徒二人を置いて、そんなに長い時間保健室を留守にするとも思えないし、さすがに六時間目まではここにはいられないだろう。実際、足の痛みは随分和らいできていた。確か次は社会だし、いいか。これ以上、贅沢は申し

ません。

それでは残り少ない幸せタイムを貪るかど、僕がカーテンを閉めようとするど、川崎まりあが骨ばった手でカーテンを掴んだ。

「あ、待って。」

僕の中の苛々ゲージアップ。

「何か用？」

「名前。」

搾り出すように一言こう言う川崎まりあ。意味不明。僕に名乗れと言っているのか？ 僕に何を求めている訳、君は？ ああ何だコイツああ面倒臭い。道理で出来すぎだと思った。体育の時間、保健室のベッド占領なんて。こんなトラップありますか？

「ねえ…な、な、ナオ君でしょ？」

重ねてこう言う川崎まりあ。ダブルトラップ！ 自分の知らない人間が自分の事を知っているというのは何とも気持ち悪い。

「なんで？」

僕の声が小さく、囁くように変化した。相手に恐怖心を抱いてしまった。川崎まりあはそんな僕の変化を見逃さず、歯を見せてにっこり笑った。

「あのね、私見てるの、いつも。」

焦らすように、僕の反応を窺いながら、少し楽しそうに喋っている。

「ミシマやアイダがいつも『ナオ』って呼んでる所。」

「…何だよ、それ。僕がぼこられてるのを陰で見てるって事かよ？ いつからだよ？」

自然に声が大きくなった。畜生、アイダもミシマも甘いな。せめて見られないようにやってくれ。

「一ヶ月くらい前からかな。夏休み終わったくらいから。」

「何でそんなの見てんだよ、面白いか？ まあ面白いんだろうな。」

僕はベッドをたたいて目の前の顔を睨みつけた。

「面白くないよ。絶対に面白くない。」

僕の顔を真っ直ぐ、川崎まりあは見つめ返した。

「まさか誰かに言った？」

「まさか。言う訳ないじゃない。」

だんだん奴の語り口がくだけてきた。それが無性に腹立たしい。それでも、誰にも言ってないというのを聞くと、少しはほっとした。

「あのね。」

奴はカーテンをくるくると体に巻き付けて、体を揺らした。きし、きしとカーテンレールの軋む音がした。

「一年の時、ミシマ達のターゲットは私だったから。」

体育は終わったらしく、生徒のわいわい話す声が遠くから聞こえてくる。

「だから何？ 今はクラス違うし、ああ良かったっての？」

こんなに大きな声で、こんなに沢山学校で言葉を発したのは、初めてだったかもしれない。

「そんな事…ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

僕の態度に川崎まりあは急に怯えだし、ついさっきまでとは別人のように謝り出した。小刻みに動く眼球や震える唇。髪の毛をやたらと触る両手。

ああ、そうか。僕はこんな風に見られてるんだ。ミシマとアイダに、というかクラス全員に。そう考えたら、何だか全てに納得がなくなってしまった。僕のこの状況、コイツに馴れ馴れしい口を利かれた事。知らない間に名前まで覚えられてた事。くだらない事に喜びを無理矢理見つけて、自己演出している僕の事。僕に関わる全ての事に。

「もういい。」

僕は堪らなくなって、やっとそれだけぽつりと言った。

「怒ってるの？」

「別に。」

川崎まりあの顔がまともに見れない。

「嘘。声が怒ってる。」

「もういい。もういいよ。」

すっかり体の力が抜けてしまった僕は、ふらふらとベッドから起き上がり、そのまま保健室を出ようとした。

「待って。」

川崎まりあの手が僕の右の手首を掴んだ。僕は撃たれたように動けなくなった。その手は冷たくて、そのくせじっとりと汗ばんでいた。僕は後ろから秒殺されたのだ。

「誤解しないで。私、私はみんなとは違う。」

何を言ってる？

チャイムが鳴った。

「離して、その手。」

「何なのか自分でも分からない。でもね、あのね、ナオ君…。」

「名前と呼ぶな！」

振り返って、秒殺返し。

カワサキマリア。

その日の帰り道、僕は何度もその名を小さく呟きながら歩いていた。あの顔で、「まりあ」か、ギャグだよな。ガリガリに痩せてこけた頬。量だけ多いパサパサの髪。歯並びが悪くて、しまりの無い口元。目だけがやたら大きくて睫毛が綺麗に上向きに生えてる。そこがまた何だか気持ち悪いんだ。奴の親は、我が娘に聖母の名を与えた時、どんな思いをその名に込めたんだろう。そう思った時、僕は何かいたたまれない気持ちになった。

擦れ違った主婦らしき人に軽く会釈して、マンションのエレベーターに乗る。ぐんぐん近づいていく空と、遠くに並ぶ家々の境目は今日も灰色にぼやけている。

ベッドに寝転がって、ちっと手を見る。右手に残った、奴の手の感触が予想以上にしつこい。不吉な予感。ブルーの枕を抱いて、自分のにおいを確かめて目を閉じると、ほんの少し安心した。

「どうしたの？ ナオ兄ちゃん。」

開け放した扉の向こうに、アイがちょこんと立っていた。

「お帰り、アイ。早かったじゃないか。」

「今日はみんな塾か習い事だって。」

アイはすたすたと僕の方に近づいてきた。ベッドの上に両手を重ね、背を丸めて手の上に顎を乗せて僕を見る。アイの髪からは汗とシャンプーの混じったにおいがする。

「どうしたの？ 手なんか見て。」

ぷくっと膨れっ面を作って、アイは僕の右手を取った。ああ、右手が浄化されていくようだ…。

「ねえ、ナオ兄ちゃんって好きな女子いるの？」

突然の問い掛けに僕は思わず笑ってしまった。今日の二時間目、数学の後の休み時間にこんな会話が聞こえてきたのだ。

「ねえー、ミカっちの好きな男子誰えー？」

「言わないと、鈴木にウチら勝手に決めちゃうもんね。発表しまーす。ミカっちの好きな男子は鈴木ナオで一す。」

「げっ、マジ勘弁。あたしの人生終わらせる気？ マジギレすんよっ、ユリっぺ！」

その時、僕は自分の席で机に突っ伏していたのだけれど、その女子二人は教室中に聞こえるくらいの大声でさっきの会話をしていた。僕は、いつもいるかいなにか分からない存在だし、いてもいなくてもいい存在だし。今日は、たまたまその場にいた、というだけの事だ。

そんな些細な事なんか、あの保健室事件で、僕の頭の中からきれいさっぱり忘れられていた。

「あ、笑うって事はいるって事だなー？」

アイが素敵な勘違いをしてくれる。

「内緒だよ。」

「えー？ アイにも隠し事するの？ アイ、ナオ兄ちゃんになら何でも話せるのに。」

アイはそう言って、また膨れっ面を作る。

「じゃあ、アイは好きな男子いないのか？」

「いないもーん。」

「嘘だろ、アイぐらいの歳の女子なんか、そんな話ばっかしてるだろ？」

「みんなの前では『いる』って言ってる。」

「ほらみろ、誰だよ、アイの好きな男子は。」

「うーん…話したんびに好きな男子変わっちゃうんだよねえ。」

「何だそれ？」

「わかんない。でもねえー、みんなテキトーだと思うよ、相手とか。」

そう言ってアイは笑った。僕の手はアイに握られたままだ。

「冷めてるなあ。」

少し驚いた。

「サメテル？ 何それ？」

「何でもないよ。」

僕は少し眠たくなって目を閉じた。

「でも、アイはナオ兄ちゃん大好き。」

耳に入ったその台詞は夢か現か、僕は判別すら出来なかった。

疲れていたのだ。

今日は水曜日だ。毎週水曜日はノー残業デーなので、父は必ずとっていい程、家で夕食をとる。そしていつも、アイの話をにこやかに聞く。

「ねえー、アイの算数の成績が上がったら、海外旅行に行きたいなあ。」

アイのパキパキした声は、ぼんやりした僕の頭によく響いた。父の片手には黄金色の液体。綺麗なあと見とれて手を動かしていると、夕食は知らず知らず腹の中に納まってしまう。いつものことだ。

「どこがいいかなあ。ハワイ？ 定番すぎかな？ どう？ ねえ、ナオ兄ちゃん。」

アイがそう言えば僕は頷く。この家にアイがいて良かった。そう思いながら、僕は頷く。そう、まるで悪夢から開放されたかの様に。

でも、そんな都合のいい事なんて僕の身には起こらない。起こる筈もない。

次の日。数学の後に、再び奴は現れた。いつもの様に机に突っ伏して目を閉じていると、
「鈴木。」

面倒臭そうに僕を呼ぶ女子の声がした。

「マリア様が来てるよ。」

「マリア様？」

「ん。」

その女子は、教室の入り口を指差した。僕と話しているのを見られたくないんだろう、すぐに僕の机から離れていった。

「あ、あれ？ あのお方でございますか？ マリア様のお相手は！」

二人の女子が、僕の方に突進してきた。

「噂どおりの素敵なお方…。」

女子二人はにやけた顔で、僕を舐める様にじろじろ見る。思わず俯いた僕は、そんな二人を上目遣いでちらちら見ていた。二人とも鼻の穴をぴくぴくさせ、好奇心丸出しの目をしている。僕には、二人とも同じ顔に見えた。

別のクラスの女子が、よりによって僕と話しに来ているとあって、さっきまで無関心だったクラスの連中も、一人、また一人と僕の方に視線を投げかけてきた。

奴が、いた。また下を向いて肩を小刻みに震わせて、二人の女子の陰に隠れる様に立っている。それが川崎まりあ。

「ほら、マリア様。」

右隣の女子が、奴の腰を回し蹴りした。

「あら、マリア様お恥ずかしいのですか？ では、このワタクシが代わりに恋文を読んでもよろしいでしょうか？」

左隣の女子は、制服のポケットから、一枚のくしゃくしゃになったルーズリーフを取り出し、笑いながら読み始めた。

『愛しのナオ様。貴方はワタクシの王子様です。十四年間探し続けてきました。このワタクシの美しさを分かって下さるお方は、世界中探してもどうやら貴方しかいないようです。いえ！だからと言って、決してやむを得ずなどという訳では御座いません。やっとワタクシ分かったのです。この世の中で唯一、ワタクシの美しさが分かるという事は…つまり、貴方は運命の人。そうなのですね？』

「ゆりっぺ、すげー。文才あるよ。小説家になれるんじゃない？」

「えーマジ？ …っていやいやいやこれ書いたの MARIA 様だから。」

二人で声を合わせてゲラゲラ笑う。

「ナオ様、ワタクシと付き合ってください。」

奴の声がした。

二人の女子が声を揃えて

「あー？」

と言い、川崎まりあの方を見た。

「何調子乗ってるの コイツ？」

「面白いじゃん。ビッグカップル誕生じゃん。」

「やだ、ゆりっぺ本気？ ここまでやっちゃうの？ そんな予定じゃなかったでしょ。手紙読んで終わりの筈だったじゃん。」

「いーじゃん。コイツ何考えてるか分からないけどさあ、とことんまで追い詰めてやろうよ。」
ゆりっぺと呼ばれてる方の女子が、川崎まりあの髪の毛をむんずと引っ張りながら言った。僕は何とかその場に立っているだけで精一杯だった。

永遠になくならない様な、うず高く積まれたゴミの山を僕と奴は見つめていた。

「この街では、ゴミの後ろに夕陽が沈むんだよ。ねえ知ってた？」

沈んでいく夕陽はやっぱり綺麗で、悲しい程に昨日と何も変わらないオレンジ色だった。照らされている、この体が汚らわしい。

「知らねえよ。」

僕は、この世の終わりにいる様な声で答えた。

「そっか。ナオ君は“あっち”帰っていくもんね。バイバイの後。」そう言って、川崎まりあは、僕の住む方角のマンション群を見て目を細めた。一体、僕はこんな所で何をやっているのだろう。

僕と川崎まりあが一緒に帰るようになって、一週間目の今日。川崎まりあと僕は、あの女子二人から脱出をしたのだ。

あの女子二人は、告白事件の当日、最後のホームルームが終わるや否や、僕を拉致して奴の元へ連れていったのだった。一緒に帰れという事らしい。僕はすごすごと歩き出し、奴も隣についてくる。

二人は何かひそひそ話し、笑いながらすぐ後をつけてくる。

「ナオ王子、 MARIA様のお鞆をお持ちになってあげては、如何でしょうか？」

一人が奴から鞆を奪い、僕に投げつけてくる。

「あ、ナオ王子！ MARIA様のすぐ横を車が通ってるじゃないですか。駄目じゃないですか。ちゃんとMARIA様をお守りになって下さい！」

一人は奴をわざと車道側に押し出す。二人は大声でカラカラと笑う。僕は黙って下を向いて歩く。一週間、そんな日々だった。

そして今日。

「ナオ君、ナオ君てば。」

「あ？」

川崎まりあがぎょろっとした大きな目を僕に向けている。魚の様な顔だと僕は思った。

「…行くよ。」

耳元で囁かれ、次の瞬間には僕の左手を引っ張って、奴は猛ダッシュをしていた。

「あっ…。」

二人の女子の声が、もう遠い。つまり、川崎まりあは足が速い。

「大丈夫？」

走って走って、角を何度か曲がって連れてこられたこの場所。僕は尻をコンクリートにべったりと下ろし、只はあはあと息をしていた。自分が野良犬にでもなった気がした。肉体に精神や感情は勝てないらしい。怒りも憤りも沸いてこない。

「ゴメンね、急に。びっくりしたでしょ？」

奴は僕の隣にしゃがんで、にまっと笑いかけてきた。

「どこだよ、ここ。」

消えそうな位掠れた声が出た。凄味を利かせるのは、今は無理だ。あんなに走ったのに、何でコイツは平気な顔してられるんだろう。

「私の聖地。」

「セイチ？」

「そう…聖なる場所。」

「このゴミの山が？」

目の前に広がっているのは、ゴミの山以外の何物でもなかった。有刺鉄線がぐるりと周りを取り囲んでいる。ぽっかりと空いた土の上にゴミの山は聳え立っている。山の中には、錆びた自転車、洗濯機、パソコン、風呂桶、何本かのドラム缶なんかが埋もれていた。ドラム缶の下からは油が染み出しているようで、土の色がそこだけ廻りより黒かった。

そこにあの台詞が続くのだ。

『ゴミの後ろに夕陽が沈むんだよ』

「保健室で初めて会った日、あの二人たまたま近くにいたみたいなんだよね。ナオ君が出てっただすぐ後に、私も保健室を出たから何か変な事思いついちゃったみたいで。」

奴は一人で喋り続けている。

「あ、でも勘違いしないで。それと、私の告白とは何の関係も無い。本気だよ。ずっとこの場所にナオ君と一緒に来たかった。」

僕もマンション群を見た。あの建物たちのどこかに、僕の家があり、僕の部屋があり、今日もケンジ達は終わらない鬼ごっこをしている。アイは何しているんだろう。友達と遊んでいるだろうか、宿題だろうか。アイの事を考えた途端、何故だか僕は泣きそうになって、わざと夕陽をみて眩しさを感じた。

「…なあ、自分の状況、分かってる訳？ アンタさあ。」

知らず、こんな言葉がぽろりと吐き出された。

「ん？」

「マリア様なんて言われてさあ、みんなのおもちやにされてるんだぜ。」

「それが何？」

「だーかーらー、その程度って事だよ、アンタが。」

苛々してきた僕は、腰を地面に下ろしたままドンと足を踏み鳴らした。

「ねえ、ナオ君。」

「名前で呼ぶなって言っただろうが！」

奴は、僕の行動も言動もまるで気にせず話し出す。

「自分もしているでしょ？ 今、置かれた状況でどうやってやり過ごすべきか、いつも考えているでしょ？ 私、保健室でナオ君見た時分かったんだ。アイダ達に苛められて、階段から落ちたんだよね。でもあの時、保健室のベッドの上でキミは凄く幸せそうだった。その時思ったんだ。その時決めたんだ。この場所に、キミを連れてこようって。」

「勝手に僕の事を決め付けるんじゃないよ。何だオマエ？ 自分が本当にマリア様だとか思っているのかよ、何だ聖地とか言ってる。バカか。」

「思ってるよ。」

強い風が吹いた。辺りの砂、塵、ゴミがくるくると舞った。

「キミと同じ事…ううん、ワンランク上の事をして、今私は生きてるの。おもちゃ？ 上等じゃない。マリア様？ 光栄だよ。」

あの時と同じ目…「付き合いたい」と僕に言った時と同じ、眼光が僕を突き刺す。腰を下ろしたままの僕に、じりじりと奴の薄汚れた運動靴が近づいてくる。奴の痩せこけた体が、ずっと陽光を遮る。

「立ち上がるんだ。私と同じ場所に立ってナオ君。オネガイ。」

それは本当に一瞬の事だった。奴は背を屈め、僕の肩をしっかりと掴み、キスをした。

「バイバイ。」

やっぱり、川崎まりあは足が速い。後姿がもう見えなくなる。少しだけ振られた奴の左手は、ケンジと同じ様に明日を信じている手だった。残された僕。笑ってみようとする。大丈夫、こういうのは得意な筈だろ？

「独りだな…。」

笑いの代わりにでたのは、こんな独り言だった。

今更言うまでもなく、ずっとそうだったのだろう。痛い程思い知らされた事実。川崎まりあは、僕に対してどうしてそんな事ができるんだろう。ゴミの山を僕はずっと見ていた。

あのキスの後、僕は全てのモノを遠く感じる様になってしまった。あの大好きだった、アイの声でさえも。学校も家庭も透明なマントを羽織ったようだ。いや、マントを羽織ったのは多分、僕だ。

何も変わらない。変わらない世界が、マントの向こう側で笑っている。魔法は解けた。もう二度と、僕は誤魔化しながらアイを愛しいと思えない。

脱出の次の日、女子便所から水浸しで出てくる奴を見た。僕は反射的に身を隠した。

でも、その後一週間もすると二人の女子は帰りに僕を捕らえなくなった。単に飽きたんだろう。でも川崎まりあはそんな事関係なく、必ず僕を見つけ出す。あの手で僕を引っ張って、聖地まで街を駆け抜ける。

「今日がまた終わっていくね。」

奴と並んで、僕は体育座りをしてゴミの山を見ている。

「あのね、ウチねえ、あそこなんだよ。見えるかな？」

奴の手がすっと伸び、ゴミの山の遥か向こうを指差した。

「はあ？ 見える訳ないじゃん。ゴミが邪魔だよ。」

ぼそぼそと僕は言った。

「そっか。じゃあ行こう。」

「は？」

「ウチにおいでよ。」

そう言われた時、何故だか僕は今朝の事を思い出していた。

「このキッチン、日当たりが良すぎる」

いつもより30分目を早く覚ましてしまった僕が、朝一番に思ったのはそれだった。

「やだお兄ちゃん、今日は早いじゃない？」

もう母は起きていて、バターの匂いがした。

「おはよう。」

例のあの日以降、僕は自分の声が、どこか遠くから聞こえてくるようになっている。

「今日、学校で何かあるの？」

「…うん、あるよ。」

卵の焼ける音がする。何もないけど、口が勝手に動いた。食卓について、足をぶらぶらさせる。

「図書室、行こうと思って。」

「へえ、珍しいじゃない。」

母は笑った。

そっと、アイの部屋のドアを開ける。アイはまだ眠っているようだった。

「お兄ちゃん、ウチ出る時に、アイちゃん起こしてきてくれる？」

母にそう言われたから、僕はここにいるのだ。そうだ。何故だか急に熱くなってきた体を沈めようと、僕は深呼吸をする。

「…ア…」

そう口にした瞬間。

僕はアイにキスしたくなった。僕の欲望が久しぶりに蠢いている。息づいている。震える僕の

手が、アイの茶色い髪に少し触れる。

「ん…。」

アイが少し、目を開けた気が、した。

はっ！…息を呑み、アイから離れる。一步、また一步と。

そのまま部屋を出て、僕は逃げるように家を飛び出した。

朝靄の中の通学路は、あまり人がいなかった。朝陽がやけに眩しい。のろのろと僕は歩いた。

良かった。キスしなくて。

汚してはいけない。掟は守る為にある。

キスすれば、僕はきっと透明なマントを脱ぎ捨てられる。でも、その瞬間、全てが壊れてしまうだろう。そう、僕も含めて。

いつからこんな事、望んでいた？ アイとキスしたい、なんて。あの日からか？

そう断言したい。それが可能ならどんなに僕は楽になれるだろう。でも、僕の中の欲望は幼すぎて嘘すら吐けない。欲望の塊を取り囲む、歪んだ僕の精神とは大違いだ。

ズットノゾンデイタダロウ？

壊したくなんかなかった。アイを守りたかった。アイを取り囲む全てのセカイを守りたかった。それは本当なのに。神にだって誓えるのに。

ごめん、ごめんよアイ。

アイの最期のあの寝顔。あの天使のような寝顔を拝めただけで、僕はシアワセだよ。

きっと昨日までと同じ目で、同じ顔して、僕はもうアイを見る事はできない。この先、透明なマントさえ濁っていくだろう、と僕は確信した。

泣きもせず笑いもせず怒りもせず、真っ直ぐに続く道を見ていたら、何だか死んだような気になった。死んでいるのは僕か？ それともこのセカイ全体？ どっちでも同じか。

見上げれば吸い込まれそうな青空が、自分に迫ってくるように見えて、また足元に目を落とす。それでいいんだ。空なんか見るな。自分を戒めてみる。

オマエはもう、この薄汚れた靴だけ見ているしかないんだよ。

誰だ？ 僕にそんな事を言うのは？

ああ…僕自身しかいないじゃないか。

僕に話しかける奴なんて。

猫だ。猫が、僕の前を横切った。電柱に擦り寄り、ゴミ袋をつついていて。僕が近寄ると、猫は僕をじっと見た。条件反射で笑って、僕はしゃがんで右手を差し出した。汚い猫だった。目やにが膜を作っていた。猫は僕の手臭いを嗅いで、さっと逃げていった。

「はは、やっぱり。」

何故だか笑みがこぼれた。全て分かっていたかのように、僕は一人呟く。

青い空と地面に挟まれそうな、押し潰されそうな、そんな今日という日の始まり。
朝。

甲高い靴音を響かせ、僕と川崎まりあは、鉄の階段を上る。手摺りは錆びていて、手のひらが茶色くなった。アパートの名前は分からない。とにかく古い建物だ。

二〇三、と書かれたドアを、川崎まりあがゆっくりと開ける。

軋むような音。

「ただいま。」

そう言うや否や、奴は中に飛び込んでいく。恐る恐る、僕は部屋の中を覗く。カーテンが閉めてあるのか、中は真っ暗だ。

「おいでよ。」

一瞬、右手が差し出された気がしてはっとする。

「ナオ君、何してるの？ 早く。」

奴の、抑揚の無い声が聞こえてくる。

「早く。」

今度は本当に手を掴まれた。やっぱり生温かく、湿った手だった。力のままに引き寄せられ、僕の後ろで鉄の扉が大袈裟な音を立てて閉まった。

頬に一筋、冷たい汗が流れる。この部屋の空気を吸わないと、もう僕は生きていけない。

「おかえり。」

奴がそっと僕の手を離し、

「見てよ、これ。」

と言って、ぼろぼろの縫いぐるみを差し出した。小さい女の子の縫いぐるみだった。黄色い毛糸の髪の毛は傷んでいて、何本か千切れていたし、フェルト生地の場合は、薄汚れて灰色になっていた。プラスチックの黒い目玉が、かすかな明かりを反射して白く光っていた。

「何だよこれ。」

「私の神様。本当の『マリア様』はこのお方なのよ。」

奴はそう言って、部屋の隅まで走っていき、カーテンを開けた。

オレンジ色の夕陽が差し込み、部屋中の様子が見えた。台所を合わせても二間しか無いこの空間は、空虚感に満ち溢れていた。捲れ上がった畳。穴が幾つも開いた襖。隅に置かれた黒いゴミ袋。家具と呼べるものはほとんどなく、冷蔵庫が電動音を秘かに鳴らしているだけ。板張りの台所と、今居る畳の部屋に綿埃が舞っていた。

奴は部屋の隅に縫いぐるみを静かに置き、僕に近づく。

「来て。もっと奥まで。」

オマエノイウコトナンカキクモノカ。

そう言いたいのに、今朝の光景が僕の思考をストップさせる。

僕の吐いた嘘。

アイの寝顔。
底知れぬ欲望。
死んだような街。
逃げた猫。

アソコに戻りたいのか？ いや、戻る事は可能だろうか？

僕の足は、するすると部屋の奥に進んでいく。さっきより『マリア様』がよく見える。よく見ると、首が半分挽げている。

「このお方が私の前に現れるまで、私は死んでいたの。ミシマとアイダに服脱がされた日に、このお方が私を呼んだの。」

「呼んだ？」

「あの聖地—その頃の私には、只のゴミの山にしか見えなかったんだけどね—あそこで、私、泣いてたんだよね、その日に限って。普段は泣くなんて所まで、感情持っていかせないんだけど。

たまにね、ホントもうたまあ—にあるんだよ。その一瞬を、このお方は見逃さなかったんだよ。」

奴の顔が至福に満ちた安らかなものに変わっていく。

「知ってるのよ。」

川崎まりあは、何を思ったのか急に『マリア様』を抱きかかえ、声色を変えた。僕と正面に向き合うように座り直す。膝の上に『マリア様』を乗せ、手と足を動かしながら語りだした。

これは『マリア様』のお言葉、という事なのだろうか。

「知ってる。真実なんて誰も分かつちやいない。正しいモノなんて誰も見ていない。オマエ以外は。オマエには正しいモノが見える筈だ。何故なら、今、オマエは私を見てるだろう。」

びくん、と射抜かれた様に体を震わせると、奴は『マリア様』をそっと床に置き、声を元に戻した。

「あ、ごめん。たまに乗り移っちゃうんだよね。」

その時、私分かったのよ。この世界の全てが分かった。この『マリア様』を、誰もが見つけられなかった理由も。」

奴は立ち上がり、ふらふら左右に揺れながら、狭い部屋の中をぐるぐると歩き出す。

「学校とかアイダとかミシマとか、そんなの全部嘘。本当は無いモノなんだって事に気付いた。『マリア様』のいたあの場所は聖地。みんな知らない、誰も知らない。

それが分かったら、何も怖くなくなったんだよ。痛くないの。何されたって私は平気。私がキミより一段上に立ってるっていうのは、つまりはこういう事だったのでした！」

一気に喋って、崩れるように床にへたりこみ、ゲラゲラ笑う川崎まりあ。

「出来るなら、独り占めしたかったこの真理。でも、でもね。キミに教えざるを得なくなった。私の中のスイッチが、キミに繋がってる事も、また知った。」

「スイッチって、何。」

僕は『マリア様』をずっと見ながら言った。奴は起き上がり、体育座りで僕を見つめながら話す。

「だってね、本当に私、そう、『マリア様』に出会ったあの日からよ。キミの事よく見るんだ。」

鼻血出してるナオ君、鞆持ちさせられてるナオ君。

あの、保健室での運命の出会いまで六回！ 六回も出会ったのよ私達！」
奴は指折り数えて、うんうんと一人で頷いている。

六回しか、だ。たかが六回。僕と奴との関係に、特別なモノなんてある訳が無い。何故って、僕は毎日殴られてるし、蹴られてるんだ。アイダ達のレパトリーはそんなに多くないから、場所もやり方も大体同じだ。人によっては、もっと多く見てるだろう。只、目にしているだけで、みんな気にも留めてないだけ。

夏になれば暑くなるように、風が吹けば砂が舞うように、僕は殴られている。それだけの事だ。

熱弁を振るっている川崎まりあが、不意に滑稽に見える。単に、遊びは相手がいないと成立しない、という事なんだと僕は思った。ケンジがずっと鬼だったとしても、一人きりで鬼ごっこをする事は、絶対に出来ない。

意味は幾らでも与えられる。

世界は、幾らでも創り上げる事が可能だ。

僕の目の前に、大きな口を開けた不気味な創造主がいる。歪な世界に僕を引き込もうとしている。

逃げられない。

もう僕は逃げられない。僕には、もう逃げる場所が無い。

「タッチ。」

ケンジの手が、体のどこかに触れた気がした。

「バイバーイ。」

後ろ姿のケンジが、手を振って帰っていく。明日を掴める右手を振りながら…。

僕は座った姿勢のまま、声すら出せずに後ずさった。畳が埃でざらついていて、気持ち悪い。「もう怖い事なんて何もないのよ。」

僕の背中には、とうとう壁にはりついた。奴は微笑みながら立ち上がり、

「儀式を始めましょう。」

と宣言した。押入れと思える襖を開け、素早く布団を敷く。

「『マリア様』には、しっかりと見届けて頂かないとね。」

そんな事を言って、『マリア様』の顔の位置を直している。夕陽の光は死にそうな程、かすかに残っているだけ。

川崎まりあが、制服のスカートのファスナーを下ろす。幕が下りるように、すっと落ちるスカート。上着も脱ぎ出す。布が擦れ合う。

「さあナオ君。」

手が。

奴の手が。

僕を迎えにくる。

くる。

くる…。

僕は布団の上に仁王立ちになっていた。

拳を握り締めながら。

生まれて初めて、拳を握り締めた。頬も耳も、焼けるように熱かった。

川崎まりあを、殴った。奴はゆっくりと、芝居がかったかのように倒れていった。

「んふ、ふふふふ。」

奴は笑いながら起き上がる。

「痛くなんかない。」

髪をかきあげて言った。

「ほら、ナオ君も私と同じ格好になって。生まれたままの姿に。キミに触りたい。私は本当のキミに触りたい。」

そう言いながら、僕のズボンに手を伸ばす。

腹を思い切り、蹴った。思った以上に柔らかい感触。肉が、僕の脚をしっかりと捉えた。奴は

「ごふっ」

と嗚咽をして、痰と唾と血を黄ばんだシーツの上に吐いた。

「血の味がする。」

と言って、また起き上がろうとする。僕は奴の髪を引っ掴んで頭を持ち上げ、

「舐めんなよ。」

と言った。最後の抵抗だな、と自分でも分かった。

「ナオ君でもこういう事するの？」

奴はもそもそ話し、涎を垂らした。

「ねえ、今の私の気持ち分かってるでしょ？ 自分がいつもやられてる事じゃない。

痛くなんかない。『痛い』なんて、嘘の世界の事だもん。『マリア様』が教えてくれえた。みんなみんな、『マリア様』が教えてくれた。」

まだ笑ってやがる。八重歯を見せて、まだ笑ってやがる…。

「こんな事しても何もならないよ。」

「じゃあてめえと、てめえとやったらどうなるんだよ。何か変わるのかよ。保証あんのかよ。」
僕の声は、消えそうなくらい小さかったけど、奴の笑顔からは目を背けなかった。その事で、辛うじて何かを守った気がした。それが何なのかは分からないけれど。

「確かめたいの。ナオ君の体、一つ一つを全部私確かめたいんだ。本当のキミの体分かる筈。痛がってるカラダは嘘の世界のモノ。私とのキスを、あの瞬間を、ほらねえ、思い出してごらんよ。」

言い終わらないうちに、また奴の唇が僕の唇に触れた。血の味。

「その味は本物。」

奴はものすごい力で僕を押し倒した。ぐちゃぐちゃに丸まったシーツの海に、奴は僕を突き落とした。

突然。

突然、襖が開いた。女が立っていた。

「ママ。」

川崎まりあが立ち上がった。

「何なのこれ。」

歳がよく分からない女だった。この女が川崎まりあの母親？ 派手な化粧をして、派手な服を着て、きついソバージュパーマをあててるこの女が？

女はシーツの海を躊躇いもなくちりぢりにした。香水の臭いがぷんぷんしてくる。女は亡霊のように立ち尽くし、僕を見下ろしている。

「ママ、私今何してたか当ててみせてよ。」

女は何も答えない。

「セックスだよ。ママがいつも違う男と、毎日毎日やってるセックスだよ。」

殺したい程得意気な顔で、奴は女の耳元で囁いた。女は奴の顔を張り手で殴った。乾いた音が何回かした。

「うん…血の味。」

舌をねろりと出し。口の端を舐めて奴は言った。

「こんなの全然痛くない。」

帰り道、奴は僕の周りを、至極嬉しそうにずっと飛び跳ねていた。

「やっとママに言えた。ウチのママ、いつも勝手な事ばかりしてるんだよ。私の事ほったらかして、外で男と遊んで帰ってこないんだよ。さっきのあのママの顔、最高だった。

ナオ君、キミは私の神様。『マリア様』の次に私を救ってくれた、二番目の神様。今日、私は生まれてきて一番幸せ。

ねえ、ナオ君。

ケッコンしよう？」

僕は足を止める。

「なあ。」

「ん？」

「オマエさあ、それだけの為に『マリア様』見つけてきた訳？ さっきまでの本当の世界とか、聖地とかって、ぶっちゃけどうでもよかったんだろ？ 『私だってセックスできるの、ママみたいに』って、あの女に言えれば、それでよかったんだ。おもちゃ取られた子供と同じだよ。『ママ、もっと私を見て』って言いたかっただけ。

つまりはさオマエ、僕の事利用しただけなんだよな。まあ、僕ぐらいしか、利用できなかつたんだろうけどさ。ふざけんなよ！」

右頬に一発。骨同士のぶつかる音。

「僕とオマエを一緒にするな。僕には父親も母親も、可愛い妹だっているし、あんな汚いアパー

トじゃなくて高層マンションの一三〇六号室で平和に豊かに、暮らしているんだ。本当の僕は、こんな筈じゃなかったんだ…。」

腹に一発。もう止まらない。

ウソダロウ？

またどこかから声がする。

僕は聞こえないふりをする。

「あ…。」

奴が何か言いかけた。すかさず僕は殴る。

もう一発。もう一発。もう一発。

奴の顔が血塗れになるにつれて、僕はどんどん無になっていった。それは初めての感覚だった。僕は、暴力で全て解き放たれた。

もう、誰も僕を止める事は出来ない。

川崎まりあが学校に来なくなって一週間。日々は流れる雲のように、滞りなく過ぎていった。気の早い蝉が、命の限りを尽くさんとばかりに鳴いている。

「ナ・オー。」

アイダ達が僕の事を呼んだ。だから「鈴木」って呼べよ。口の中で台詞を転がす。

「なあなあ、あのフィアンセ、マリア様に来てなくて寂しかろう？ 遊んでやるよ。」

ミシマの左手には三十疋定規。今日はどこにくるんだろう。定番の尻だろうか。僕は呑気に思う。

「ねえ。」

特に、何の気負いもなく。

僕は言ったんだ。

「もっと面白い遊び、知ってるんだけど。」

何だよ…と言いかけたアイダを、ミシマが制した。

「おおお、ナオ何だそれ？」

ミシマはアイダに素早く耳打ちをする。アイダも軽く頷き

「気になる気になる。教えてくれよ。」

と身を乗り出してきた。

「じゃあさ…放課後に。」

僕と二人は聖地に立っていた。洗濯機の中に、大事に大事に仕舞ってあるマリア様二体一ぬいぐるみと川崎まりあーを、僕は二人に見せた。

「入るかどうかが微妙だったんだけど、折り畳んだらすぼって入っちゃった。」

臭いも随分強くなっている。ゆっくりと縄を解く。生身の方のマリア様が、ごろんと地べたに横たわった。一週間で、マリア様の体はかなり小さくなったように思う。顔も手も足も、綺麗に紫色に染まっている。僕が放課後ずっと一週間、殴り続けた成果だ。

二人の目の前で、またマリア様を殴る。

「救われるよ。分かったよ、君等が僕を殴り続けていた訳。やめられないよね。こんなの、やめられる訳無いよ。」

もうマリア様は喋らない。目も開けない。

「ねえ…あれ。」

さっきまでそこにいた二人の姿は、もう無かった。まあどうでもいい事だ。

やっと分かったよ。マリア様。マリア様が作った掟は正しいよ、お陰で僕は、嘘の世界に取り込まれずに済んだんだ。その世界は、僕を利用なんかしない筈。

僕を苦しめる為に、あるいは子供じみた欲求の為なんかに、あんな素晴らしい言葉を、マリア様が用意する筈なんかないから。

一段上に立ったら、怖いモノなんて何もないんだ。本当だね。

「ケッコンしようね、マリア様。」

マリア様にそっとキスする。マリア様は目を閉じている。けれどその奥の瞳には、僕に見えるモノと同じ世界が、きっと映っているに違いない。